令和5年度　十日町市立馬場小学校　学校経営方針

校長

1　基本方針

馬場小の子どもが日本人としての誇りをもち、自分や友達との関わりを大切にし、自分の夢や希望を実現しようとする力を育む。そのために知・徳・体「確かな学力、豊かな心、健康な体」の育成に向けての教育課程を編成し、保護者や地域と連携し、全教職員で組織的に教育活動に取り組み、質の高い教育の実現を図る。

2　教育目標

教育基本法 ・人格の形成 ・自主自律 ・幅広い知識・教養 ・伝統文化の尊重　等	**馬場小学校教育目標** **心豊かに自らを切り拓く子どもの育成** **重点目標** **自分の可能性を信じ、自分の夢や希望を実現しようとする子ども**	新潟県学校教育の重点 今後目指すひとづくりの姿 ふるさとへの愛と誇りを胸に、夢や希望を持って粘り強く挑戦し、未来を切り拓いていける、たくましいひとづくり
学習指導要領 ・主体的・対話的で深い学び ・カリキュラムマネジメント ・家庭、地域との連携と協働		十日町市学校教育のめあて ふるさと十日町市を愛し、自立して社会で生きる子ども
将来の変化を予測が困難な時代の中で、自らの人生をどのように拓いていくか？　また、自らの生涯を生き抜く力を培うには？		水沢中学校区目指す子どもの姿 自信をもって行動できる子ども～自己有用感を育む教育の推進を通して～

目指す子どもの姿

・学び方を身に付け、意欲的に学習しようとする。
・友達や周りの人と進んで関わろうとする。
・進んで体を動かし、健康的に過ごそうとする。

やる気・元気・根気の馬場小魂

やってみよう　やればできる　馬場小魂　パワーアップ

子どもに付けたい力

（低学年）自分のことは自分でできる。友達と仲良くできる。　⇒自己肯定感をアップ
（中学年）学級のことを自分たちでできる。友達の良さを認め協力できる。⇒人間関係形成力アップ
（高学年）学校全体のことを考え、行動できる。　⇒自治的活動力アップ

3　教育目標達成のために

〇チーム馬場小

・１つの家としての馬場小。全教職員で３９名の子どもを見守っていく。
・「この子どもが１８歳になった時、きちんと自立できているか？」の視点で、「適度な距離感で」を大切にする。→目は離さず、手を出しすぎず。子どもだからできなくて当たり前。だから教師がよりよい方向に指導する。一人一人の成長には個人差があり、時間がかかるもの。根気強く指導する。
・職員の和を大切にし、心配事は一人で抱え込まない。

〇授業こそ命

・学校で一番時間を占めるのは授業である。授業の中で、学力向上、生徒指導、社会性の育成を行う。
・日々の授業の充実、基礎学力の定着、その学年での学習事項はしっかり押さえる。
学びの基本は“知的好奇心”、“意欲”。子どもも教師もワクワクするような授業の実現を目指す。

→各学年の学習事項の系統性も意識する。
どの子どもにも分かる喜び、できた達成感を味わわせる。＝やればできる。汎愛村校の精神（※注）

〇仕事術、多忙感の解消

・組織としての学校、その仕事の基本「報告、連絡、相談、確認」。早め早めの職務の遂行を心掛ける。
※進捗相談２割→５割→８割　　「早しよし、遅し悪し、ちょうどよき危うし。」
・目の前の活動が何のためのものかを意識する。「目的の明確化」＝やらされ感からの解放
※初心忘るるべからず＝なぜあなたは教師（教職員）を目指したのか？　初任の頃のことを思い出す。
→あなたにとってやりがいとは？

〇職員集団として

・学校は「安心・安全の場」でなくてはならない。いじめ・不登校など心にかかわるトラブルは細心の注意を払い、チームとして迅速に対応する。（未然防止と初期対応）
危険個所、安全管理にも細心の注意を払う。物の管理も大丈夫か？　ハインリッヒの法則　１：29：300
※頸から上のけがにも注意する。命のかかわる事故は何をおいても最優先にする。
・学び続ける教師集団を目指す。様々なことにまず教師が興味をもつ。教師こそ「やってみよう」。
何より教職員が心身ともに健康であることが大切である。子どもにとって最大の教育環境は教師である。担任が生き生きしていることが何より大事！　健康に留意する。
※非違行為防止：非違行為によって、誰が一番悲しむか？　子どもが一番迷惑することを忘れない。
教師への信頼関係が崩れる。信頼関係のないところに教育は成立しない。
・一人の人間として、自分の持ち味を大切にし、自分の得意技を伸ばし、人間的魅力を高める。

〇地域とともにあり地域の中にある学校

→社会に開かれた教育課程　学校と保護者・地域が協働して子どもを育てる。
・保護者との関わり方：保護者にとっては自分の子どもはかけがえのない存在であることを忘れない。
・学校運営協議会ＣＳとの連携、地域人材の活用・発掘→学校支援地域コーディネーターと連携する。
・老人会、地域の施設との連携を進める。
・市教委とも連携していく。

※合言葉「やればできる」について　当初の看板の揮毫 元馬場小校長（第８代）　星名武男先生（中条在住）

子どもたちの大好きな「やればできる」。しかし、安易に合言葉に頼って、努力を怠ってはいないであろうか。実際にやってみることによって、達成できる可能性が広がることは確かだが、「やればできる」と唱える（精神論）だけでは、「できる」可能性は低い。スタートの動機付けとしての「やればできる」から、「できた」につなげるために、次のことに取り組む。

① 子どもたちの意欲を育て、見通す力（計画力）を養い、行動力を育てる。「できる」ようになるためのスキルを習得させる。目的、目標、方法を明確にする。学習における「自己調整力」を身につけさせる。
② うまくいかない時の対処法（レジリエンス）を知る。レジリエンス：落ち込んでも立ち直る力。失敗した時や人に助けられた時にも育てることができる。成功しなくても成長していることに気づかせる。
③ 根気強く取り組むことも大切。
ある意味、耐性を育てるタイミングを見逃さない。できるまでやり続ける根気強さ。

やる前から「ぼくにはできません」と聞くことがある。できませんと言っている限りは、まずできない。子どもに「やってみよう。できるかも。この機会を生かして頑張ればできるかも」と思わせ取り組ませて、適切な支援を行うことで「できた」という経験を積ませる。それが重点目標にある「～自分の夢や希望を実現しようとする子ども」を育てることにつながる。

汎愛村校の精神：汎愛＝全てに差別なく、博く愛すること。

明治４年、馬場村の庄屋である富井邦彦氏は、この地に学校を設立しようと、支援者の協力を得て、自費をもって学校を設立した。（米百俵で有名な小林虎三郎もこの地に来たことがある。その影響もあったか？）
当初の校名は「汎愛村校」。これが馬場小学校の前身とされる。明治の学制発布より１年早く学校ができたということで、馬場小学校は市内で一番古い学校とされる。令和３年度＝創立１５０周年、令和４年度＝記念式典挙行。

汎愛村校の精神は即ち、全ての子どもに学習の権利と教育活動に参加する機会を保障することである。